

English Cafe

Vol. 2

小中連携の現場から

Preface

先生方は子どもの興味を引き出すプロ！英語は後からついてくる？！

小中連携につながる異学年交流の試み

宮城県仙台市立金剛沢小学校教諭 白井ゆかり

小中合同授業、その無限の可能性

秋田県由利本荘市立鳥海中学校教諭 菅原徳浩

Zoom

ブータン王国に学ぶ「英語教育」



Preface

先生方は子どもの興味を引き出すプロ！英語は後からついてくる？！

英語版の紙芝居と折り紙で、何とも素敵なブータンでの国際交流授業です。英語はあくまでツールです。伝えたいこと、紹介したいことがあると、英語は後からついてきます。English Cafe Vol.1 で福島大学の高木先生が、「子どもの興味を、関心のある話題を取り入れながら、自然な流れでたくさん聞かせる、手を変え、品を変え、自然な流れで英語を繰り返し聞かせる」と書いていらっしゃいました。他教科・領域の指導経験や先生方の得意を生かし、先生方も英語の授業を楽しんでいただけたらと思います。

<交流授業の流れ>

- 1 あいさつ&プチマジック
- 2 紙芝居① 英語版
『みんなでポン』 by まついのりこ
『おおきく おおきく おおくきくなあれ』
- 3 折り紙講座 「カエルを折ります」
- 4 お土産披露
日本の子供たちが折った折り紙です。
- 5 折り紙で交流 「じゃんけんパンダ」
紙芝居には子どもたちとインラクティブな活動も入っています。お土産は日本の子どもたちが作った折り紙です。ブータンの子どもたちは、私語もなく笑顔で拍手。手裏剣やパンダを作り、そしていつも “Thank you, Madame!” とても礼儀正しいのです。



<英語の紙芝居を小中連携授業で活用>

小中連携の重要性が叫ばれていますが、英語の紙芝居を使っての交流も考えられます。準備も簡単です。中学生は、英語の自己紹介と紙芝居の英語の音読練習を頑張ります。場面があって、目的があり、何よりもお兄さん、お姉さんに遊んでもらえて児童は大喜びです。管理職の先生方の体制づくりがますます重要になってきそうです。

小中連携につながる異学年交流の試み

宮城県仙台市立金剛沢小学校教諭 白井ゆかり

「新学習指導要領」の実施を目前にして、小中連携の意義とその在り方が一層重要性を増してきています。さまざまな実践例には成功例もあれば課題もあり、時間もかかります。地域や学校の実態、児童生徒および教師の状況等を考慮しつつ、どこから何をどのように進めたらよいのか、悩むところです。

そこで私は、「人と人とのつながり」「つなぐ」ということを実践のテーマに据え、義務教育9年間の学習のつながりをイメージし、小学校での異学年交流の授業実践、さらにその延長として小中間での学び合いにつなげたいと考え、実践に取り組んでみました。児童生徒自身が「異学年での学び合い」に意義を感じることができるように在り方を探りたいと考えています。

1 多様な異学年交流の試み

① 教材で「つなぐ」

- ・対象学年 一5年生と6年生
- ・ねらい 一前年度作成した上級学年の資料を見ることにより、後輩の児童が学習への興味関心を高めたり、学習のゴールの見通しを持ったりして、作品作成の際に参考にする。
- ・活動の実際

6年生が前年度に作成し、活用した発表作品（資料）などを、今年度の5年生に提示する。例えば、*Hi, friends! 2 Lesson 5 “Let's go to Italy.”* で作成したパスポートや *Hi, friends! 1 Lesson 7 “What's this?”* で作成したクイズを、デモンストレーションで提示したり、5年生が作成する際の手本にしたりしました。

→児童にとっては同じ学校の先輩の作品に対して親近感を感じ、さらに活動のイメージを持つことができました。先輩が取り組んだ学習活動を自分たちもやってみたいという憧れや、活動意欲を喚起することにつながったと感じました。



What's this? シルエットクイズ

② 単元の内容を共有した交流授業で「つなぐ」

- ・対象学年 一5年生と6年生
- ・ねらい 一共通の学習内容（自己紹介）にかかわる単元で、英語を使う楽しさを体験する。
- ・活動の実際



交流の様子

5年生のUnit1 “Hello, everyone.” と6年生のUnit1 “This is ME!”

の両単元を合わせて、お互いに自己紹介しあいました。学習してきた英語を使って “Hello. How are you?” “My name is Ken. Nice to meet you.” “I like cats. What animal do you like?” といった基本的な自己紹介からはじめました。相手に伝わるように繰り返して話したり、“Me, too.” などと相づちを打ったりしながら対話に挑戦する姿が見られました。さらに、6年生が5年生に “When is your birthday?” などの5年生の未習の表現を使って尋ねていましたが、月を指で示した5年生のジャスチャーを理解して、6年生が “Your birthday is May.” などと英語に直してあげている姿も見られました。

→しっかりと話す6年生に対して、5年生は「さすが6年生だ。」と憧れの気持ちを抱き、他者尊重の意識を持つことができ、5年生にとって身近な目標となりました。6年生は上級生としてリードしなければならないという自覚を高めると同時に、自尊感情を高めることになりました。「同じ誕生日の人を見つけられてうれしかった。」「名前も知って知り合いになったから、声をかけたい。」とお互いをより近い存在として認めることになりました。英語でのやりとりを通して子供同士がつながったと感じました。



Big Book の読み聞かせ

③ 委員会活動における上学年と下学年との交流活動で「つなぐ」

- ・対象学年 一図書委員会の高学年児童と低学年児童
- ・ねらい 一英語を使って本の読み聞かせをすることで、他者理解、相手意識を高める。

・活動の実際

朝の時間に、図書委員会の児童が定期的に1, 2年生への絵本の読み聞かせをしています。そこで、希望者を募り、英語の本の読み聞かせにチャレンジすることになりました。絵本中の文章表現を読むのではなく、下級生の様子や反応を見ながら“What's this?”や“What color is this?”と動物や色を尋ねるような簡単な表現を使ったやりとりをしながら、英語の本を通して楽しく関わりました。

→高学年児童は低学年児童に分かるようにと簡単な英語を使ったり、同じ英語を何度も繰り返したりしました。

そのことは相手意識を高めることにつながり、さらに学習した英語を使って伝わったという自信が生まれました。「1年生が楽しんでくれて良かった。」「英語をたくさん使えたし、通じてうれしかった。」と感じていました。今後、児童の主体的自主的な活動になる可能性があると感じました。

④ 中学校からのビデオレターを授業で活用する—異校種間交流で「つなぐ」

・対象学年 一卒業生の中学生1年生と小学6年生

・ねらい 一まもなく中学校に進学する6年生に対して、中学生がビデオレターで中学校生活について伝え、6年生が中学校生活への期待と先輩への憧れの気持ちを抱けるようにする。

・活動の実際



中学生が話す内容は、小学校で使う言語材料をもとに構成し、中学校に提案しました。小学校6年生段階で理解できるものに加えて、今後出会うであろう未習の表現も入れました。内容は、中学校の教科や部活動、行事などについての情報です。中学生は後輩の小学生に分かってほしいという思いから、ゆっくりはっきり話すと同時に、話す言葉に強弱をつけてながら作成したこと、中学生の満足感や自尊感情を持つことができました。Unit9 “Junior High school Life” の導入時に、6年生に見せました。顔見知りの先輩が話す英語を聞いて、「すごいなあ。あんな風に話せるようになりたい。」と憧れの気持ちを持ちました。また、中学生生活について「ますます楽しみになった」と期待をふくらませていました。

2 成果と今後の方向

このような交流学習の成果として、どの活動にも共通していたのが、意欲の高まりです。授業の中で、指導者がモデルを示したり、デモンストレーションをしたりすることはよくあるかと思いますが、子どもたち同士の交流だと、より集中して見たり、聞いたり、話したりします。それは、ともに学校生活を送っている仲間として、そして、少し手を伸ばせば届きそうな目標として、指導者よりも身近に感じられるからだと思います。「あのようにできたらいいな。」「わたしもやってみたいな。」と思う意欲につながりました。

また、英語という言語が、「人と人をつなぐ」ことができるのだと、改めて感じることができました。外国語だからこそ、日本語を使うよりも「どうやったら伝わるかな。」「伝わるように話してみよう。」などという相手意識が生まれました。それにより、お互いを尊重し合ったり、理解し合ったりする関係を築くことができました。つまり、異学年交流は双方にメリットがあり、他者理解、自尊感情を高めることに意義があったと感じています。

そう考えると、小中連携も同じかと思います。学校は離れていても同じ小学校で育った仲間として、さらに高いレベルのスキルを身に付けた手本として、憧れの気持ちを持って小学生は中学生を見ます。中学生には、後輩を大事に思う気持ちと自信が生まれます。英語を通してすぐそばにいなくてもつながりを感じていると思います。

また、このように取り組んだことで、中学校の先生にも小学校の学習内容や言語材料を理解していただくことができました。小中連携のスタートラインに立つことができたと感じています。

今後、異校種間の教師同士がつながることで、小学校の外国語活動の授業を実際に見ていただく機会や、小中の教師のTTによる外国語の授業実践の機会をつくること、さらには、今回のような言語材料の交流だけでなく、小学校で使っている教材を中学校でも使っていくなど、中学校の英語学習へのスムーズなつながりとなる小中連携の姿—「つなぐ」を築くことができるよう模索していきたいと思います。



小中合同授業、その無限の可能性

秋田県由利本荘市立鳥海中学校教諭 菅原徳浩

本校は今年度、学校創立 20 周年を迎えました。鳥海中学校は準へき地校であり、開校当時から地域に温かく見守られ、伝統を継承している学校です。また、鳥海小学校と校舎連結型のコミュニティ・スクールとして小中一貫教育の実践および充実を図る役割を担い、9 年間を見通した教育活動の一層の推進に全職員で取り組んでいます。

1. 中学校教員による乗り入れ授業

本校には鳥海小学校への兼務発令を受けている教員があり、国語、社会、算数などの教科の授業に T2 として参加しています。外国語も同様で、小学校 5、6 年生の授業に週あたり各 2 時間ずつ参加し、主に ALT とのモデル演示やコミュニケーション活動の支援を中心に行っています。T1 を担当する小学校学級担任による細案は英語で作成され、ALT との授業準備も日々、綿密に行われています。小学校校舎と中学校校舎が廊下 1 本でつながっているため、異校種の教員による授業の打ち合わせを容易に行うことができる点は、本校の大きな特徴の 1 つであると言えます。年度末に行われた小中合同職員会議では、以下の成果が挙げされました。

- ・TT のモデル提示を通して、子どもたちの目標とする姿をはっきりとすることができます。
- ・児童の学習状況を予め把握できるため、中学校授業のスタートを円滑にすることができる。
- ・算数、理科、外国語は 1 人 1 人の子どもの個別指導にも対応でき、非常に効果があった。

小中連携は、教科指導に留まらず生徒指導においても有効です。児童の実態を日々共有することで、中学校入学後に必要な指導上の留意点を全職員で共有することができます。

5、6 年生の授業いずれにおいても、教師は基本的に英語を使用するように努めています。鳥海小学校高学年の学級担任は、授業における指示や学習課題の確認、英文モデルのやりとりの際にオールイングリッシュにより展開をしています。時に英語表現が難解で児童にとって理解しにくい場面がありますが、ALT とのやりとりの演示や中学校英語科の教員との掛け合いを演示することで、理解を促しています。英語を聞く能力が徐々に養われてきていることを感じますが、特に小学生は、ALT の発音を忠実に真似しようとする傾向が中学生よりも強く見られます。アルファベットや単語の識字能力はもちろんのこと、フォニックスの指導の早期充実を図ることで、今後より一層、読む力の向上を図ることができるのでないかと考えています。

6 年生が小学校生活の思い出を振り返り、表現する際に使用する語の難易度は、高いと言えます。しかし、学級担任や ALT による「ポインティングゲーム」や「キーワードゲーム」等の実践を積み重ねることにより、意味を即座に判断する力が養われています。これにより、小学校の段階からある程度のインプット能力が高められることで、中学校入学後の英語の学習におけるリスニングの能力の素地を養うことができていると感じます。

小学校外国語教育の課題は、表現の口頭練習の繰り返しが、即興でのやりとりに直結しにくいことです。Yes-No Question だけではなく、疑問詞を含めたやりとりや相づちなどの表現を付け加えていき、スマートルステップで表現を蓄積していく必要があります。6 年生は日常会話の Q and A シートを帶活動に繰り返し使用して対話をすることで英語を学ぶ雰囲気作りをしています。生徒の対話の流れが自然なものとなるよう、適宜場面設定をしていくことが重要です。

2. 小学生と中学生の合同授業

鳥海小学校 6 年生の児童を中学校に招待し、中学 2 年生との合同授業を行いました。教員の中学校への乗り入れは日常的に行っているので、中学校の英語学習の雰囲気を体感してもらうこと、「鳥海地域の伝統を継承する」こと、「中学校生活への期待感を醸成する」ことの 3 点を授業のねらいとし、中学校教室棟の英語教室で授業を行いました。

中学2年生は教科書 *Sunshine English Course* のProgram 9 Video Projectにおいて、鳥海地域の伝統芸能である「篠笛（横笛）」や中学校の部活動、学校行事等を紹介する映像作品を作成しました。なお Program 5 Gulliver's Travels では学習した文法事項（There is-, 接続詞の if / when）を活用して鳥海地域の魅力を紹介するミニポスターを作成し、英語教室に掲示しました。なお、小学生は篠笛を演奏したことなく、また、体育祭や学校祭などでは「鳥中オリジナルソーラン」を踊ることから、実際に演じる様子を小中合同で学ぶことでねらいの達成に向かいました。



鳥海 PR ポスター（施設、名産等の紹介）

本授業では自分の好きなスポーツや音楽を表現したり、want to を用いて自分の意向を表現したりする活動を行いました。お互いに既習事項であるため、口頭でパターンプラクティスを行った後にすぐにインタビュー活動に移りました。馴染みのある上下関係ではありますが、児童は授業を通して中学校生活への期待感をもつことができたようです。ある児童の振り返りには、「私は卓球部に興味があります。先輩が優しく、分かりやすく話してくれたので、とても楽しみになりました。」とありました。教員の兼務だけではなく、生徒ー児童間の乗り入れも容易に行うことのできるこの環境は、日頃から共に地域の良さに触れ、感謝し、伸びやかに成長していくための大きな財産であることを感じます。



中学生の間に小学生が着席



中学生が小学生の活動をリードする

このように、教員の乗り入れに加えて生徒ー児童間の交流を容易に行うことができる環境は、小中連携を推進していくのに効果的であると言えるでしょう。鳥海地域の子どもの数は減少し続けているが、地域住民とのつながりの強さは昔のままです。外国語教育においても鳥海地域の伝統を継承することの一助となることができるよう、今後も取組を推進していきたいと思います。





Zoom

ブータン王国に学ぶ「英語教育」



ヒマラヤ山脈の佛教国、ブータン王国は、3代国王の強いリーダーシップで、近代的な教育を推し進めてきました。その教育を受け継いできた人々は英語圏でも言葉に苦労することなくグローバル社会を渡り歩いています。ブータンの国語はゾンガ語ですが、難解な上、自然科学や技術の分野で表現しきれない言葉もあるため、学校教育は英語に頼らざるを得ないという事情もあるようです。

東日本大震災の後、5代国王夫妻が来日し、「幸せの国」として人気が高まりましたが、小学校から国語以外は基本的に英語で授業を行うというブータンの教育制度に興味を持つ英語教育関係者が増えています。

ブータンには『クエンセル』という国最大の新聞があります。国語と英語の2か国語で提供されており、オンラインニュースを利用すれば手軽に国の情報を得ることができます。先日、その動画に16歳の女子高生のインタビューの様子が映し出されました。建国記念日にちなんだ仏教の式典で4人の司会者の1人に選ばれたという彼女は、その喜びを生き生きと英語で表現していました。しかも、聞き取りやすいしっかりとした英語です。この動画を見たとき、特殊なお国事情とはいえ、ブータンの英語教育の頼もしさ、そして豊かな人材を育んでいるという国の誇りを見せつけられた思いがしました。もちろん、英語が公用語のブータンと、英語が外国語であるわが国の英語教育を一概に比較はできません。しかしながら、迫りくる英語教育改革を前に、何が私たちにとっての「切り札」となるのでしょうか。

確かに言えることは、小学校の先生方の熱意や努力が少しずつ学校現場を変えているということです。初等教育の専門家として、異文化コミュニケーションの視点や教科横断型の汎用的な教育を英語の指導に生かせると確信しています。そして「英語っておもしろいな！」という興味や気づきを今以上に子どもの心に植え付けてほしいと思います。

思考を深める言葉への興味や敬意の「種」を、日々の実践で育み、いつか必ず「芽」を出すときがきやってくると信じ、子どもたちが本気で「言葉の学習」に向き合うような素地づくりに励みたいものです。

本冊子は「教科書発行者行動規範」に則って、配布を許可されているものです。

English Cafe Vol.2 非売品

 開隆堂出版株式会社
KAIRYUDO 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎ 03(5684)6111

北海道支社 〒060-0061 札幌市中央区南一西6-11 札幌北辰ビル8階 ☎ 011(231)0403
東北支社 〒983-0852 仙台市宮城野区福岡4-3-10 仙台TBビル4階 ☎ 022(742)1213
名古屋支社 〒464-0802 名古屋市千種区星が丘元町14-4 星ヶ丘プラザビル6階 ☎ 052(789)1741
大阪支社 〒550-0013 大阪市西区新町2-10-1 6F ☎ 06(6531)5782
九州支社 〒810-0075 福岡市中央区港2-1-5 FYCビル3階 ☎ 092(733)0174

2020年2月28日印刷 2020年3月7日発行 編集兼発行人 大熊隆晴

発行所 開隆堂出版株式会社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1

☎ 03(5684)6121(営業), (5684)6118(販売), (5684)6115(編集) <http://www.kairyudo.co.jp/>